

特集 日本近現代の作家と西洋

緒言

杉本圭子

本特集は二〇一九年十月一日から同月一七日にかけて、明治学院大学と港区の共催で行われた「みなと区民大学——日本近現代の作家と西洋」（全六回）の講演の記録である（本号には、巖谷國士氏の講演を除く五回分の記録を取めた）。今回は日本近代文学、英米文学、フランス文学を出発点に、広く比較文学、比較文化的な関心に根ざした著作を発表しておられる研究者六名をお迎えし、日本近現代の作家と西洋の文化、文学、宗教とのかかわりについてお話しただいた。

明治学院は開学以来、外国人宣教師を教師に迎え、西洋の

学問、文化とのかかわりの中で伝統を紡いできた。たとえば学院の卒業生である島崎藤村（一八七二—一九四三）は大学で英文学を専攻して英語教師となり、その後四十歳を過ぎて単身フランスに渡り、第一次世界大戦中の一時期をパリやリモージュで過ごした。異国の風土や文化の中に身を浸した経験は、帰国後の新たなテーマや言語表現の追究へとつながったとされる。藤村からやや遅れ、本講座で扱われた六人の作家たちは、戦後生まれの中上健次を除き、いずれも世紀の変わり目に生を受け、大正、昭和にかけて文筆活動を展開した世代である。日本の近

代化の使命を帯びてヨーロッパに渡った漱石や鷗外の世代とは異なり、彼らは独学に近い形で語学を学び、関東大震災や思想統制といった歴史の荒波に耐えながら、おもに書物を通じて西洋文明の新たな潮流を感じ取った。その多くは英文学科出身で、フランス語やドイツ語の著作はしばしば英訳を通じて読んでいた。

萩原朔太郎らとともに日本の近代詩を切り開いた大手拓次（一八八七—一九三四）は、フランスの詩人ボードレールの翻訳と紹介を通して、日本における象徴詩の可能性を追求した。島山達氏の講演では拓次が日本語で実現しようとした象徴詩がどのようなものであったかが、理論（詩論）と実践（詩作）の両面から具体的に示された。ダダ・シュルレアリスムの紹介と実践で知られる瀧口修造（一九〇三—一九四五）も英文学科出身で、恩師であった西脇順三郎の蔵書を通じてこの運動を知るが、内容的にシュルレアリスムとほぼ無関連の西脇の詩論が『超現實主義詩論』として世に出たことで、その後、瀧口が運動の正しい理解を促すために多大な努力を強いられたことを、瀧口と親交のあった巖谷國士氏が明らかにした。自ら自動記述の詩を実践しつつ、ブルトンの主著のひとつ『シュルレアリスムと絵画』を翻訳し、生涯にわたって改訳に努めたのである。

「翻訳は文学の栄養素」と銘打った野崎歙氏の講演では、古来、漢字文化から多くの要素を取り入れてきた日本語が、明治期に西洋語、西洋文化を取り入れることによって「再創造」さ

れた過程がたどられ、谷崎潤一郎（一八八六—一九六五）や井伏鱒二（一八九八—一九九三）の文体にも翻訳文体の影響が多く見られることが指摘された。その後、両者は日本語の中の「異国」的な要素（方言）をも取り入れ、新たな言語の創造や人物造形へと向かうが、そこには鷗外ら明治の作家たちとは異なる西洋文化との距離の意識や、自己を相対化する視線が感じられるという。日本文学のフランス語訳を手がけるジャック・レヴィ氏の講演では、翻訳という作業を通して見えてくる中上健次（一九四六—一九九二）の文章の特質がとりあげられた。紀州熊野を舞台とする連作小説群を支える独特の人称の使用法と、話法の転換を通じてなされる視点の主体の移動が、どのような語りの効果を生んでいるか、興味深い指摘がなされた。

今回の連続講演ではこうした比較文学的なアプローチに加え、広く比較文化の方面に考察が及んだ。富山英俊氏は仏教思想との関連において論じられることの多い宮沢賢治（一八九六—一九三三）の作品の中で、キリスト教的なイメージが現れる箇所に着目する。小説『銀河鉄道之夜』の中の白い十字架と天界のイメージや、ある時期の詩の中の、地上に現れようとする「神の国」のイメージが、いずれも正統的なキリスト教の教義に沿ったものではなく、当時の日本に伝来していた人間主義的な教義解釈や、内村鑑三らキリスト教伝道家の「再臨運動」の影響下に書かれた可能性を指摘した。篠崎美生子氏の講演では、芥川龍之介（一八九二—一九二七）による精神分析学の受容の

問題を超えて、『鹵車』を中心とする晩年の作品解釈に焦点があてられた。晩年の芥川は「無意識」や超自然現象、異常心理に深い関心を寄せ、フロイトを中心とする精神分析学の書物を英訳で読んでおり、作家自身がそうした解釈を誘うような書き方をしていたこともあって、これらの作品はしばしば自殺の事実からさかのぼって「遺書」として読まれることが多かった。ただ、テキスト自体として読んでみると行間にはときにユーモアも漂い、「苦悩の芥川像」は、むしろ当時支配的だった作品の私小説的な解釈によって定着した面があるとの指摘は、たいへん刺激的であった。

日本近代の作家たちが異国の言語や文化に触れ、激変する社会の中でいかにして新たな言語表現、造形表現の可能性を切り開いていったのか。今回の連続講演では翻訳の問題、文化受容の問題を超え、従来の作家理解や作品解釈を問い直そうとする局面も多く見られた。会場からは聴講者の多彩な読書遍歴をうかがわせる質問が寄せられ、講演者とのやりとりもまた興をそそるものであった。専門研究の枠にとらわれない、広い視野に裏打ちされた講演者たちの自由闊達な話しぶりに、企画側としても大いに刺激を受けた。